025856-000-2

94-455

境港案内

里見 周三／編

M39

ADC-3409

94-455

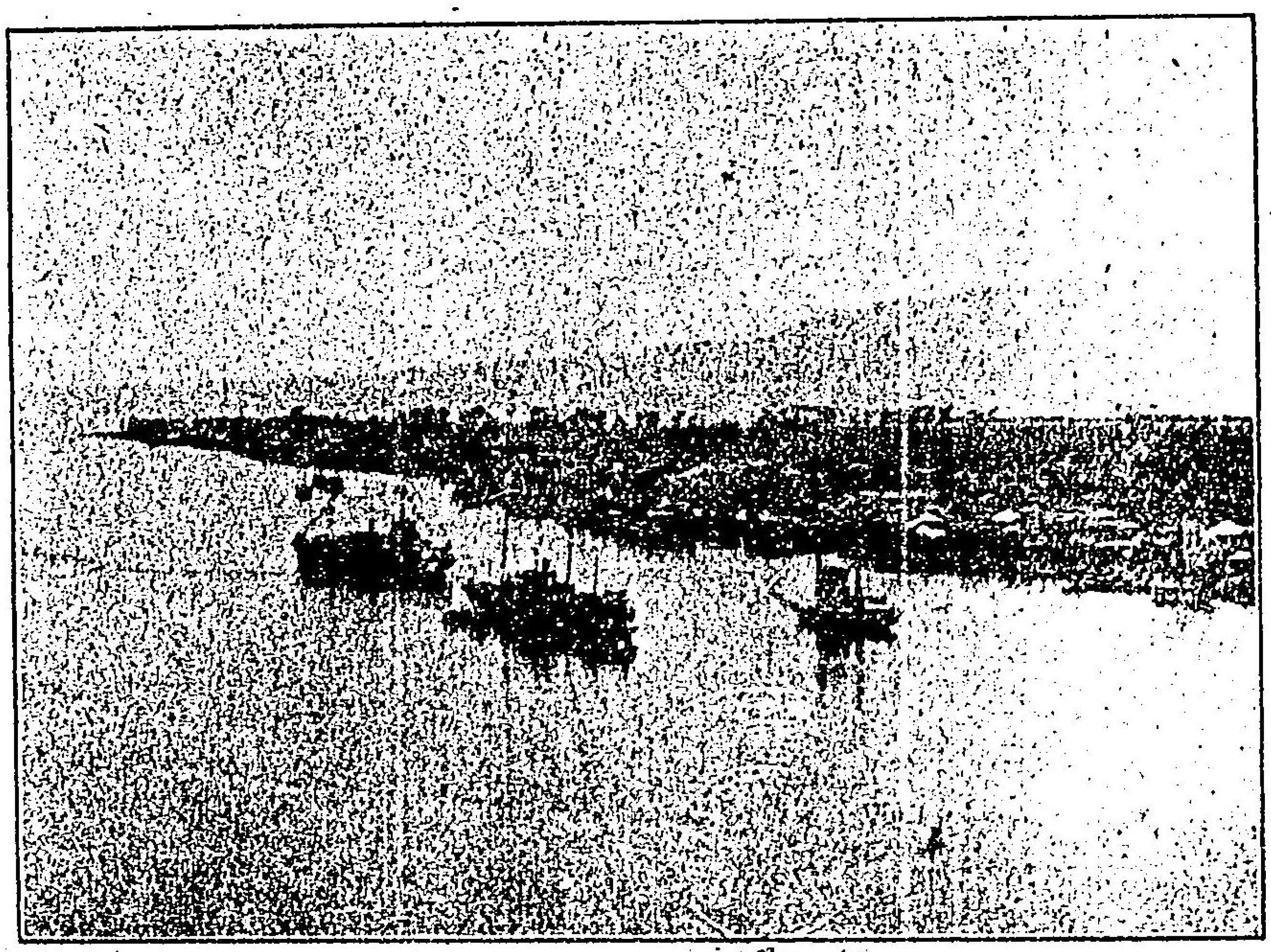
本書は本會の囑托により杉谷卓氏公務の餘暇之れが編纂の任に從事せられ成稿せしものなり本會は玆に同氏及各種の材料を供せられたる諸氏の勞を謝す

明治三十九年九月下旬

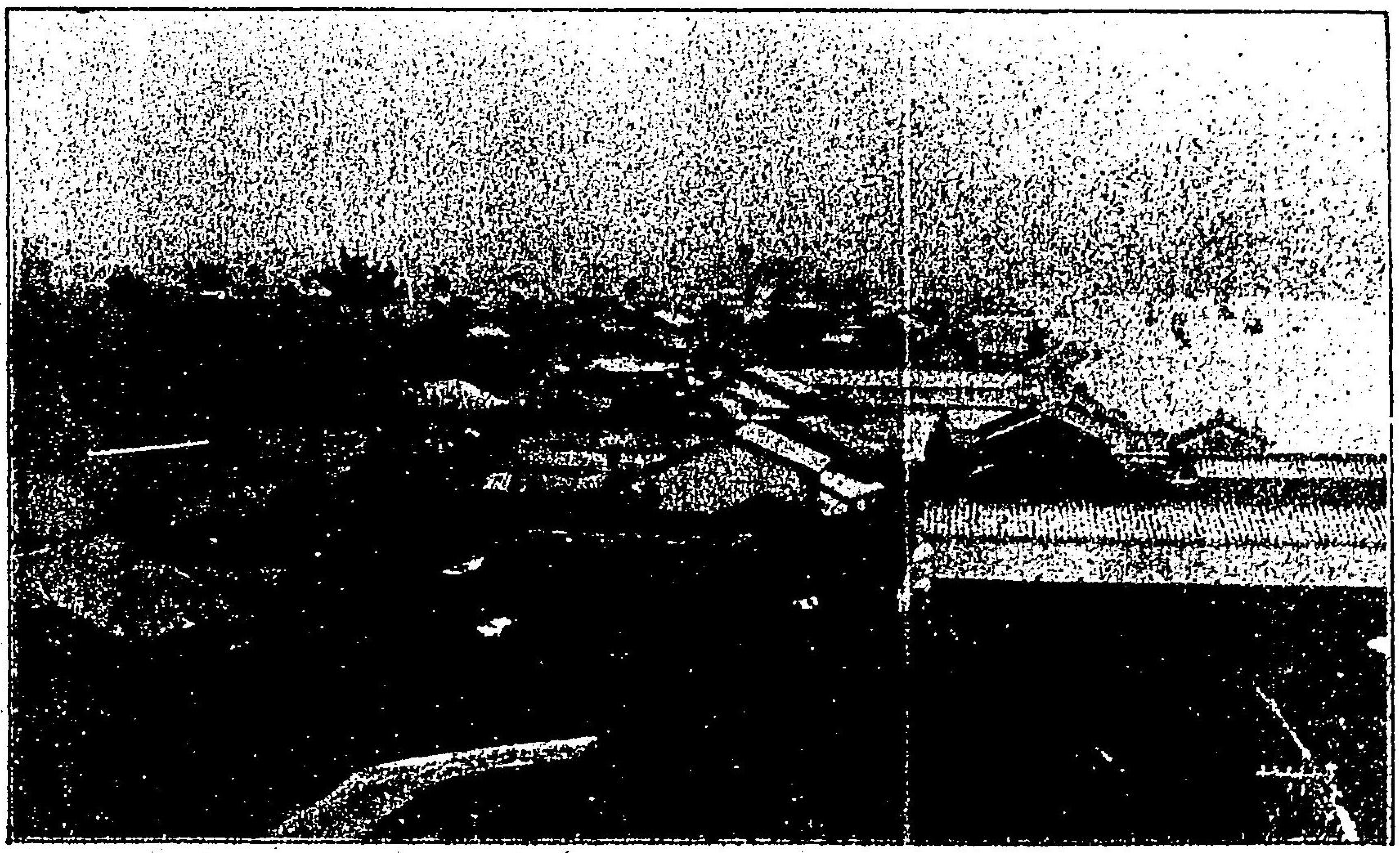
發行者　境商工會

境商工會寄贈本

境港之光景



海岸全体、物揚場二間道路二間都合幅員四間此延
長七百八十間東西直線境内港の沿岸にあり之山陰
唯一の公共荷揚場なりとす



港口燈臺構内より境内港を望む

境港案内目次

緒　言……一

境の港灣……一

境の市街……二

境の交通

内　譯

（馬關航路）……三　（北海航路）……三

（外國航路）……八　（舞鶴航路）……一〇

（東航路）……一一　（西航路）……一二

（四十曲越し）……一二　（倉吉回り）……一三

（鳥取回り）……一四　（廣島より）……一五

（濱田より）……一五

境の外國貿易……一八

近傍物産及境の輸出入……一九

自治機關及衛生機關……二〇

實業機關……二一
官衙と學校……二二
銀行と會社……二二
海員講習會と境港商報……二二
港外の浚渫……二三
神社と寺院……二三
造船所……二四
臺場公園……二五
海水浴場……二五
商工人名錄……二六

94-455

境港案内

緒言

我境港は山陰道唯一の良港灣にして鳥取島根両縣貨物の集散地とす日本海唯一の要港と稱せらる世の山陰實業界に游泳せんと欲するもの殊に其風光を觀るの必要あり而れども未だ曾て旅客の爲めに輕便にして簡易なる手引案内なきは何人も等しく遺憾に思ふ處なるべし本會爰に感ありて本書を刊行す故に本書は徒らに種々なる文華を弄びて趣味饒なりとなし漫りに色々の穿鑿立をなして考證精しと誇るが如き苟も旅客の迷惑となるべき冗漫の文字は力めて之を避けたり要は少なくとも實用に供せらるゝあらば即ち足る也今や境港は駸々として進歩發展しつゝあれば今後或は書中六日の菖蒲十日の菊たるもの無きを保し難しと雖とも是は之世上止むを得ざるの常事讀者乞ふ之を諒せよ

境の港灣

境港は鳥取縣西伯郡半島の北端に位置し東に美保灣を擁し西に中海あり島根縣八束郡の半島西より東に走しるものに相對す其海峽南北平均三丁餘東西一里餘水深干潮二十七尺是を內港と稱す波浪靜穩にして千噸前後の船舶直ちに海岸に繫留し敢て端艇を要せす又境町の東端燈臺より以東一里余南北十五丁餘の一面海底岩石なく而かも水深を保つ事干潮平均四十尺如何なる大艦巨船と雖とも碇泊せられさる時なし之を外港と云ふ境港とは此內外兩港の總稱にして區域頗る廣大なり然るに日本海の冬季は東北風吹き荒む事多く而して之が避難港たるべきもの漠々たる日本海面僅かに舞鶴、敦賀、及我境港なりと云ふ

境の市街

內港の南岸外港の西にあり入船、相生、東、西の四區に分つ往昔は坂江、池川、出泉の三ヶ村にして雲州富田の城主尼子氏の一族龜井能登守安綱天文の頃之を領し居れりと云ふ自治制施行前は榮町外廿一ヶ町と稱へたり土地總反別百二十一町八反十七步地價金三萬四千七圓六十錢貳厘戶數人口明治三十九年八月三十一日の調査に由れば左の如し

戶數　千五百五十九戶

內	專業	兼業
商	三百六十五戶	二百四十八戶
工	八十八戶	十六戶
農	九十五戶	百七十戶
漁	二十戶	三十戶
雜	五百二十七戶	

人口　五千九百八十六人

內
男　二千七百八十二人
女　三千二百〇四人

境の交通

當港に來るに海陸の二道あり各航路陸路里程及賃錢表を左に揭ぐ

(一)馬關航路

一週間一回定期下之關及門司を發し直ちに當港に入るは日本郵船會社の滊船也海上百九十浬此航海十八時間を費やす又下之關より濱田を經て入港する大家商船會社の滊船あり又大阪商船會社滊船は隔日大阪を發して高松、多度津、今治、三津濱、下關、門司、仙崎、萩、須佐、江崎、濱田、温泉津、鷺、杵築に寄港して定期入港す此航海四日間を要するも下關門司よりは二日間也又社外船にして大阪商船寄港地の外久手大浦に寄港するものあり故に此航路は各船を通じて毎日出入を見ざる事なし

各港より境港に來る船客運賃表左の如し但通行稅一等五十錢二等廿五錢三等四錢より多からずは別也

明治三十九年四月十六日改正

港名	一等	二等	三等
杵築（鷺）	一圓三十五錢	九十錢	六十錢
久手	二圓四十錢	一圓六十錢	一圓〇五錢
大浦	三圓十五錢	二圓十錢	一圓四十錢
温泉津	三圓十五錢	二圓十錢	一圓四十錢
濱田	三圓八十五錢	二圓五十五錢	一圓七十錢
須佐（江崎）	四圓二十錢	二圓八十錢	一圓八十五錢
萩	四圓五十錢	三圓	二圓
仙崎	四圓九十五錢	三圓三十錢	二圓二十錢
門司、下關	五圓十錢	三圓四十錢	二圓二十五錢
三津濱	六圓三十五錢	四圓五十五錢	二圓七十五錢
今治	六圓四十五錢	四圓六十錢	二圓八十錢
多度津	六圓八十錢	四圓八十五錢	二圓九十五錢
神戸	七圓三十五錢	五圓三十錢	三圓二十錢
大阪	七圓六十錢	五圓四十五錢	三圓三十錢

（二）北海航路

小樽を發し函館、能代、土崎、酒田、新潟、直江津、伏木、七尾を經て

敦賀に寄港せる日本郵船會社の滊船一週一回定期入港す敦賀より當港迄海上百四十三浬此航海十四時間を費やす此航路は官鐵北陸線と接續の便あるを以て京阪との往復は極めて便利也帝都に入らんとするもの大概此航路を採れり船名及賃錢表左の如し

船名	噸數	船客搭載人員 一等	二等	三等
酒田丸	一、六九三	六		二〇四
近江丸	二、五〇一	三七	二二	一四八
榮城丸	二、五〇六	六		九四
熊本丸	一、九九三	四		一七二
千代田丸	一、六七五	六		三二
スピール號	一、四一七			九四
和歌浦丸	二、五二七	四		九五

各港ヨリ境港迄ノ船客運賃

港名	一等	二等	三等
神戸	十二圓	八圓	四圓
尾ノ道	十圓五十錢	七圓	三圓五十錢
門司	六圓	四圓	二圓
敦賀	六圓	四圓	二圓
七尾、伏木	十二圓	八圓	四圓
直江津	十三圓	九圓	四圓五十錢
新潟	十五圓	十圓	五圓
酒田、土崎	十八圓	十二圓	六圓
能代	十八圓	十二圓	六圓
函館	二十四圓	十六圓	八圓
小樽	二十七圓	十八圓	九圓

尚は通行税一等五十錢二等廿五錢三等四錢より多からすを別に要す且又社外船の運賃は左の如し一等二等は著しく割安也

各港と境港間運賃表

港名	一等	二等	三等
小樽	十八圓	十三圓五十錢	九圓
函館	十六圓	十二圓	八圓
青森	十六圓	十二圓	八圓
能代	十四圓	十圓五十錢	七圓
土崎	十二圓	九圓	六圓
酒田	十一圓	八圓二十五錢	五圓五十錢
新潟	十圓	七圓五十錢	五圓
直江津	九圓	六圓七十五錢	四圓五十錢
伏木	八圓	六圓	四圓
敦賀	四圓	三圓	二圓

（三）外國航路

宮津を發して浦鹽斯德に至りコルサコフに向ふもの甲線あり又濱田を發し釜山、元山、城津を經て浦鹽斯德に至りコルサコフに向ふもの乙線あり凡て當港に寄港す其他に釜山馬山へ航する滊船あり賃錢表左の如し

大家商船會社滊船乘客賃表（各港より當港迄）

甲線	一等	二等	三等
浦鹽斯德	三十三圓五十錢	十九圓	九圓五十錢
コルサコフ	九十六圓五十錢	五十五圓	二十七圓五十錢

乙線	一等	二等	三等
釜山	二十一圓	十二圓	六圓
元山	三十五圓	二十圓	十圓
城津	四十二圓	二十四圓	十二圓
浦鹽斯德	四十五圓五十錢	二十六圓	十三圓
コルサコフ	九十三圓	五十三圓	二十六圓五十錢

岡田回漕店扱滊船乘客運賃（各港より當港迄）

	一等	二等	三等
釜山	十圓	七圓五十錢	五圓
馬山	十二圓	九圓	六圓

(四)舞鶴航路

舞鶴を發して直ちに翌日午前六時入港するものなるも途中賀露に寄航する事あり阪鶴鐵道連絡の航路なり大阪境間の往復には時間を要する事最も少なく速達の便利あり舞鶴境間僅かに十二時間を要す而かも用船は最新式なる阪鶴丸にして美麗清潔旅客に快感を與ふる事を力めたり當港は隔日午後五時出港翌朝未明舞鶴着午後三時大阪に入る事を得べし賃錢表左の如し

	一等	二等	三等
境大阪間	十圓	六圓	三圓七十錢
境舞鶴間	七圓二十錢	四圓四十錢	二圓八十錢

(五)隱岐航路

隱岐國より當港に入る定期航路也西郷を發し知々井及美保關を經て入港するもの航海六時間に過ぎず又西郷を發し津戸、菱、別府、浦郷、知夫、崎村、美保關に寄港して入港するもの航海約十時間を要す凡て隱岐汽船會社の汽船西郷境間双方隔日の發着にして郵便船也當港と各港との乘客賃錢は凡て同一にして一等貳圓二等一圓五十錢三等壹圓なり

(六)東航路

隱岐汽船會社の汽船隔日舞鶴を發し宮津、津居山、濱坂、加露、橋津に寄港して當港に入るの航路也鳥取或は丹後但馬との間に旅行するもの丶爲め大に便利也各港よりの乘客賃錢表左の如し

	一等	二等	三等
橋津	壹圓	八十錢	五十錢
加露	壹圓六十錢	壹圓二十錢	八十錢
濱坂	二圓六十錢	一圓九十五錢	一圓三十錢

津居山	三圓	二圓廿五錢	一圓五十錢
宮津	四圓六十錢	三圓四十五錢	二圓三十錢
舞鶴	四圓六十錢	三圓四十五錢	二圓三十錢

（七）西航路

毎日一時間半毎に松江を發し入江を經て當港に入り進んで美保關に到るものにして一日七回發着する小瀛船の航路なり境、松江間乘客賃錢舩尾室二十四錢舩首室十八錢境、美保關間舩尾室十一錢舩首室七錢此航海松江、境間は二時間美保關、境間は三十分間を要す

（八）四十曲越し

岡山より津山、板井原、米子を經て當地に入るものにして岡山、津山間は鐵道中國線の便あり新庄、板井原間二里餘の中心に四十曲峠の嶮あり二人輓にあらざれば人車通行する能はざるも京阪地方より陸路當地に入るもの大多數此道に倚れり里程表左の如し

	里程	累計
津山		
坪井	三里、一〇	
久世	三、〇五	六、一五
勝山	一、二八	八、〇七
美甘	三、二六	一一、三三
新庄	一、二三	一三、二〇
板井原	二、一三	一五、三三
根雨	一、三二	一七、二九
江尾	一、三一	一九、二四
溝口	二、二一	二二、〇九
米子	三、一四	二五、二三
境	瀛車　拾哩八鎖	

（九）倉吉回り

岡山より津山迄は同様鐵道中國線に乘じ津山より竹田、黒木、上齊木を經て倉吉に達し倉吉より官鐵陰陽線に由て當港に入るもの里程表左の如し但與津穴鴨の間二人挽にあらざれば車行し能はざる嶮あり

倉吉より	中繼所名	賃金	車走時間	里程
	曾源寺	金四拾錢	一時五十分	三里廿二丁

上齋原	金六拾壹錢	三時五十分	五里十二丁	津山まで金壹円九拾壹錢但し夜中及雨雪泥濘のときは二割増
黒木	金四拾九錢	二時卅五分	五里廿七丁	
寺元	金貳拾四錢	一時卅五分	二里廿七丁	
竹田	金貳拾壹錢	一時十分	二里廿八丁	
津山				
計	金壹圓九拾壹錢	十一時間	二十里八丁	

(十)鳥取回り

鐵道山陽線(播州)上郡より駒歸(駒歸に嶮坂ありて二人輓にあらざれば車行し能はず)を經て鳥取に出て青谷に至りて官鐵陰陽線に乘じ直ちに當地に入るもの里程表左の如し

	里程	累計
上部		
佐用	里五、〇七	
古町	四、二六	九、三三
駒歸	三、二六	一三、二三
智頭	二、三〇	一六、一九
用ヶ瀬	二、二七	一九、一〇
鳥取	五、一三	二四、二三
賓木	四、二六	二九、一三
青谷	二、二四	三二、〇〇
境	滊車 五十四哩四鎖	

(十一)廣島より

廣島より阿部　吉田　三次、赤名、宍道、松江を經て當地に入るもの宍道松江間四里二十一丁は小滊船に乘じ西航路松江境間の小滊船に乘換ゆるを便利なりとす里程左の如し

(自廣島至吉田)十一里十七丁　(自吉田至三次)六里三十二丁
(自三次至赤名)五里十六丁　(自赤名至掛合)八里二十四丁
(自掛合至宍道)八里三十四丁　(自宍道至松江)四里二十一丁
(自松江至境)海上十三浬

(十二)濱田より

石見國よりは馬關航路に倚るを便とするも舩を厭ふものは左の陸路によるべく凡て人車の通行せざるなし里程左の如し

(自濱田至江津)六里三十丁　(自江津至大森)九里二十丁　)自大森至太田)二里二十八丁　(自太田至今市)九里十丁　(自今市至平田)二里二十二丁　(自平田至松江)六里二十四丁　自松江至境)海上十三浬

青谷境間着發時間及賃錢表(◎は切符通用期限內隨意下車驛)

下り列車

驛							二等 青谷ヨリ	三等 青谷ヨリ
青谷發	|	六、三五	九、三五	一一、五五	後二、五〇	五、三五		
泊發	|	六、四八	九、四八	一二、〇八	三、〇三	五、四八	一三	七
松崎發	|	七、〇〇	一〇、〇〇	一二、二〇	三、一五	六、〇〇	二三	一三
◎倉吉發	|	七、一六	一〇、一六	一二、三六	三、三一	六、一六	三三	一八
由良發	|	六、三五	一〇、三四	一二、五七	三、四九	六、三五	四九	二八
八橋發	|	七、四八	一〇、四七	後一、一〇	四、〇三	六、四九	六〇	三四
赤崎發	|	八、〇二	一一、〇〇	一、二三	四、一五	七、〇二	七〇	四〇
下市發	|	八、一五	一一、一四	一、三七	四、二九	七、一五	八一	四六
御來屋發	|	八、二八	一一、二八	一、五一	四、四三	七、二八	九一	五三
淀江發	|	八、四六	一一、四六	二、〇九	五、〇〇	七、四五	一、〇九	六三
熊黨發	|	八、五七	一一、五七	二、二一	五、一一	七、五六	一、一九	六八
◎米子發	前六、三五	九、二〇	一二、二〇	二、四五	五、三三	八、〇五	一、二六	七三
後藤發	六、四三	九、二八	一二、二八	二、五三	五、四三	|	一、三三	七五
大篠津發	七、〇二	九、四六	一二、四六	三、一一	六、〇二	|	一、四七	八四
境着	七、一〇	九、五五	一二、五五	三、二〇	六、一〇	|	一、五六	八九

上り列車

驛							二等 境ヨリ	三等 境ヨリ
境發	|	前七、三五	一〇、三五	後一、五〇	四、四〇	六、三〇		
大篠津發	|	七、四六	一〇、四六	二、〇二	四、五一	六、四一	一一	六
後藤發	|	八、〇四	一一、〇四	二、一九	五、〇九	六、五九	一八	一六
◎米子發	前六、三〇	八、二五	一一、二五	二、四〇	五、三〇	七、〇五	二三	一八
熊黨發	六、四〇	八、三五	一一、三五	二、五〇	五、四〇	|	四一	二三
淀江發	六、五一	八、四七	一一、四七	三、〇三	五、五二	|	五一	二九
御來屋發	七、一〇	九、〇七	一二、〇七	三、二二	六、一二	|	六七	三八
下市發	七、二三	九、一九	一二、一九	三、三四	六、二四	|	七七	四四
赤崎發	七、三五	九、三三	一二、三三	三、四八	六、三八	|	九〇	五一
八橋發	七、四七	九、四五	一二、四五	四、〇一	六、五〇	|	九八	五六
由良發	七、五九	九、五八	一二、五八	四、一三	七、〇三	|	一、〇九	六二
◎倉吉發	八、二二	一〇、二〇	後一、二〇	四、三五	七、二五	|	一、二六	七三
松崎發	八、三二	一〇、三一	一、三一	四、四六	七、三六	|	一、三七	七八
泊發	八、四四	一〇、四三	一、四三	四、五八	七、四八	|	一、四七	八四
青谷着	八、五六	一〇、五五	一、五五	五、一〇	八、〇〇	|	一、五六	八九

境の外國貿易

稅關支署開設已來年々增加し前途益々好望の地步にありしが明治三十七年日露戰爭の爲め多少の頓挫を來たしゝに拘らず明治三十八年に入りて戰爭の影響を被むる事至て尠なく后半年平和克復貿易順調に歸し非常なる速力を以て殆んど前年度に倍額を見るの多大なる增加を顯はせり尚は益々增加の趨勢なり其實況左の如し

種別		明治三十八年	明治三十七年	前年に比し増●減
輸出	内國産	六九、二〇八、六四〇円	二八、三八〇、四一〇円	四〇、八二八、二三〇円
	外國産	四、六二三、五七〇	四、〇八二、九六〇	五四〇、六一〇
	計	七三、八三二、二一〇	三二、四六三、三七〇	四一、三六八、八四〇
輸入	内國産	〇	二九、四〇〇	●二九、四〇〇
	外國産	一二二、五一〇、四三〇	七三、四〇五、四五〇	四九、一〇四、九八〇
	計	一二二、五一〇、四三〇	七三、四三四、八五〇	四九、〇七五、五八〇
輸出入合計		一九六、三四二、六四〇	一〇五、八九八、二二〇	九〇、四四四、四二〇
輸入超過額		四八、六七八、二二〇	四〇、九七一、四八〇	七、七〇六、七四〇

輸出入商品價格表　明治三十八年分

輸出 品名	價格	輸入 品名	價格
木材及板	四六、〇八七、一八〇円	大豆	九六、〇六一、八五〇円
諸綿布類	八、〇六〇、七九〇	肥料	一四、六五四、三〇〇
精米	七、五九五、三九〇	牛皮	五、〇九八、〇一〇
陶器	二、〇三四、〇七〇	穀類	四、一一八、六〇〇
酒類	一、五九八、四二〇	木材及板	六五九、八二〇
縄莚叺	一、三三七、八六〇	干鱈	六〇一、五四〇
其他	七、一二八、五〇〇	其他	一、三一六、三一〇
計	七三、八三二、二一〇	計	一二二、五一〇、四三〇

近傍物産及境の輸出入

物産の重要なるものは米、麥、生糸、繭、海産物、綿、木材、鐵、銅、銑、木綿、織物、紙、葉煙草、清酒、醤油、陶器、縄、莚、叺、石材、干温飩、人參等とす今當港を經由して輸出入するものを見るに明治三十六年は輸出

六百四十八万六百九十圓輸入七百十六万二百六十圓明治三十七年は輸出七百二万千九百圓輸入六百七十五万四千圓明治三十八年分は末尾別表の如し

自治機關

明治二十三年自治制度の施行せらるゝや榮町外廿一ヶ町の稱を廢して單に境町となし入船、相生、東、西の四區を以て行政區域と定む町行政の當局者は町長(名譽職)助役(名譽職)有給助役收入役各一名町會議員は定員十八名なり

衛生機關

市街の南端舊末廣町に驅黴院あり縣立なり

土地閑雅頗る眺望に富む舊花町の東南字荒神灘に傳染病院あり因に當町の飲料水は大概戸毎に井戸を有し之を用ゆるも海岸に面する井水は多少の臭氣ありて飲用に適せず其他は凡て無色透明の良水なり

又當地方の氣候は温和なる事左の如し

三十六年平均温度　一四、二一　　三十七年仝上　一四、一

三十八年仝上　一四、二

三十九年自一月至七月平均温度　一二、一

實業機關

鳥取縣境測候所　縣立にして明治十六年の創立に係り午前午后とも六時十時二時の六回観測をなし尚は日々天氣豫報を發して當業者に周知せしむ

境商工會　明治三十八年四月の創立にして會員百三十名事務所を境町六百七拾壹番邸に置く役員左の如し

會長　荒木平三郎　　副會長　栢木節雄

理事　山本熊吉　渡邊廣太郎　里見周三　堀丁吉　加島惠太郎

境町農會　明治三十九年八月の創立にして會員二百名事務所を境町役場内に置く役員左の如し

會　長　山本熊吉　副會長　加島惠太郎

代表者　杉谷卓　副代表者　酒井萬四郎　幹事　木村虎次郎

其他同業組合等枚擧に遑あらず

官衙と學校

境警察署、境郵便局、境測候所、境海務署、境稅關支署、米子區裁判所境出張所、境航路標識所、境驛、境商業補習學校、境尋常高等小學校、境驅黴院

銀行と會社

株式會社第三銀行境支店　株式會社境通商銀行
株式會社松江銀行境支店　株式會社中國貯蓄銀行境支店
境製糸合名會社　境貿易株式會社
境倉庫面谷足立合名會社　隱岐汽船株式會社境支店
大阪商船株式會社境支店　阪鶴鐵道株式會社出張所
日本郵船株式會社境出張所　境食鹽合資會社
其他合名會社合資會社各種會社代理店等あり

海員講習會と境港商報

境海員講習會　高等海員養成の目的を以て本年四月西區海岸通元稅關跡に開設せり講習期三ヶ月間にして學費一期十五圓他に何等の費用を要せず第一期卒業生十六名は悉皆本年七月境海務署に於て施行せる海員技術試驗に及第し各乙種二等運轉士丙種運轉士等の免狀を得たり目下第二期講習中なり

境港商報　當地に於ける物價及商況を報導するの目的を以て境印刷合資會社より毎週一回定期發行す當地の商人之を各地の取引先へ送付し自家の通信に代用するを以て當地物價商況の唯一なる通信機關として京阪地方は勿論北海北陸九州臺灣滿韓を問はす當地と商業上の關係ある處は何れの土地と雖とも郵送せられざる處なし

港外の浚渫

內港の入口外港の北面に三四百間東南に走る寄洲あり干潮漸く十二尺の水深を保つに過ぎずして船舶の出入に方り不便なるため本年四月鳥取縣に於て全寄洲取除きの目的を兼ねて浚渫工事を施す事となり目下福浦沖東南延長五百間小濱沖東南延長四百八十間を浚渫しつゝあり竣工の曉は內外港が殆んど一致するの時にして日本海面第一

等無双の良港となるべし

神社と寺院

餘子神社は　郷社にして市街の中央老杉古松大榎の繁茂する地に大港神社、龜井神社の二社と相並んで鎭座まします故に此邊を三社境内と云ふ深く人界を離るゝにはあらねど境内著しく神靈の尊嚴を感ぜしむるの値あり夏季多く涼風滿ちて散策を試むるもの不尠水菓子氷等を商ふものゝ大樹の下に仮屋を建て客を呼ぶありて宛然小公園の觀あり境内尚は蛭子神客神北野神西灘神等の末社あり又西に隣接して樹木の繁茂する處岡畑神社木野山神社あり舊花町に荒神諏訪神船魂神在り

光祐寺　一ヶ寺なり淨土宗心龍山と云ふ舊松ヶ枝町に在り境内頗る廣面くして靜閑なり

説教所　日蓮宗人品派は字縣道に眞宗大谷派は舊松ヶ枝町に日蓮宗教會場開妙永運結社は字新道に曹洞宗總永寺出張所は舊花町に天理教會所小濱支所出張所は字新道に黒住教講社説教所は舊末廣町に基督教説教所は舊相生町に在り

造船所

文化の頃より舊藩御廻米舩の造船及修繕所として今の入船區に造舩所あり一時盛大を極めたるも明治維新と共に廢せらる目下市街の東端に在るを境港造船所と稱し又市街の西端に在るを里見造舩所と云ふ何れも西洋形船舶の造舩及修繕の需めに應ずるなり

臺場公園

舊藩炮臺にして面積約二町斗也町の東端に在りて市街の中央より七八町斗にて達すべし未だ設備完成せざるも東面一流の高處に三個の茶亭あり北隣燈臺ありて奇趣を加へ見渡す限り頗る廣壯なり整然たる弓濱の白砂青松瞰下すべく角盤山其他の諸山と美保灣とは相對して眺め面白く關の五本松亦た呼べは答んとし日本海より境港へ境港より日本海へ織るが如く出入する船舶は總ての山水と共に一眸に集りて宛然油畵を見るの感あり其光景の自然美なる人をして無限の感興を起さしむるものあるべし彼の徒らに人工を施して大部分を作成

する世間の公園と同一の觀にあらず

海水浴場

臺場公園の下海濱に在り風光明媚にして伯耆富士の稱ある角盤山と美保灣を望む打寄す浪に海水涵濁の憂なし海底凡て之れ小粒の砂のみ一片の貝殼なく一葉の海草なし一面何れを泳ぎ廻るも手足を怪我するの危險更らになく某大醫博士が海水浴場として避暑地として多く其比を見ずと云へりし如く鹽分強き海水面の遠き沖より吹き撫で來る冷風は三伏の炎天も忘るゝに足れり一度玆に遊ぶもの呼吸の上にも皮膚の上にも効顯著しきを感ぜざるはなし海邊温浴の設備あり茶亭あり近傍の家又僅少の謝金を以て座敷を用立つもありて攝生保養の好適地なり夏期遠來の客近年益々夥し

商工人名錄（其一）

●肥料商		販賣	門永昇平
仲買	岡田庄作	仲買販賣	由浪時三郎
仲買	渡邊多七郎	仲買	米本兵太郎

販賣	黒見權平	販賣	柏木竹松
仝	黒田豐次郎	仝	景山梅松
仲買	松本源二	仝	景山權太郎
仝	境貿易株式會社	仲買販賣	由浪時三郎
仝	木村千松	仲買	米本兵太郎
仝	澁谷房太郎	販賣	高塚隣吉
仲買販賣	須山忠藏	仲買	田中六一郎
●米穀商		仝	植田虎市
仲買	石井富三郎	販賣仲買	黒見茂市
販賣	西村勇治郎	仝	黒見繁吉
仝	西庄九郎	販賣	黒見亘四郎
仲買	富谷熊吉	仝	黒見熊次郎
販賣	大古戸由一郎	販賣仲買	松谷曠
仝	老松直二郎	販賣	小仲勘太郎
仲買	岡田庄作	仝	足立武平

仲買 手島好平
仝 里見五平
販賣 境貿易株式會社
仲買 酒井萬四郎
仝 澁谷房太郎
販賣仲買 森半藏
販賣 杉山音太郎
仝 秋本市藏

●海産物四十物商

販賣 西友太郎
仲買 面谷仲吉
販賣 林九郎
仝 田中六一郎
販賣仲買 黒見繁吉
仲買 安見好太郎

仲買 足立權太郎
仝 里見五平
販賣仲買 佐々木平七
仲買 三島乙次郎
仝 下西宏
販賣 廣崎辰造
販賣仲買 廣崎文七
仝 角房松
販賣 酒井淸太郎
仝 中村市太郎

●製造業

醬油 花原俊一
船舶 林德助
淸酒 面谷仲吉
仝 面谷友太郎

淸酒 岡空林太郎
仝 根平竹松
醬油 山本安九郎
仝 藤本國十郎
仝 里見周三
生糸 境製糸合名會社

●呉服雜貨商

呉服雜貨 加島房太郎
雜貨 加島惠太郎
呉服 柳楽捨市
雜貨 村尾喜平
呉服雜貨 松尾初藏
仝 手島定一郎
仝 足立民一郎
仝 荒木久九郎

雜貨 佐々木文七
仝 八木橋辰藏

●木材商

仲買 沼田直四郎
仝 大下六太郎
仝 竹森淸藏
仝 増榮源五郎
仝 酒井萬四郎
販賣 南節藏
仝 木村六太郎

●諸販賣業

肉類 細井一
菓子 土井平三郎
干温飩 戸田熊藏
藥種 面谷仲吉

木炭、水	大谷虎太郎
古着	渡邊善平
陶器	門永淺一郎
足袋	貝田勘四郎
生魚	由永柳三郎
疊表呉座	竹本岩藏
菓子	田中萬之助
干温飩蒟蒻	長榮吉郎平
金物	村上章
生魚	植田宮松
雜物	山本淺太郎
石油、鐵	松下哲成
酒	松本榮太郎
藥種	增谷慶一郎
繩	藤本國十郎
洋酒雜貨	小泉壽一郎
酒、雜貨	五藤節
塗物	足立好松
雜物	足立富太郎
古物	佐々野芳太郎
清酒	木村千松
古着	木村長太郎
茶	由木清治郎
干温飩	由木桂一郎
紙具	下西定太郎
清酒	引野千種
砂糖、油類 麥粉	森彌作
砂糖	森忠藏
清酒	杉谷熊太郎
菓子、古着	門脇辰太郎

履物類	植田文太郎
雞卵	中村市太郎
時計、眼鏡	黑見近次郎
藥種	里見庣次郎

●金錢貸付業

祝艮之助
門永昇平
黑見熊次郎
松下專治郎
小酒長一
足立民一郎
足立好松
下西定太郎
森彌作
荒木平三郎

山本安九郎
里見周三

●旅人宿

香川旅館	香川文太郎
油屋旅館	植田虎市
布袋屋	黑田捨五郎
唐津屋	松谷雄五郎
結城屋旅館	由木藤太郎
引野旅館	引野千種
仝	渡邊甚太郎

●運送回漕周旋業

岡田	岡田庄作
角店	渡邊回漕店
	境貿易株式會社
栢木	栢木節雄

石井	石井富三郎	銀行支配人	恒松且一
		會社事務員	植村與太郎

●料理屋業

料理	生田太郎平	商店事務員	山本平太郎
		仝	松本庄太郎
銀行事務員	堀了吉	仝	揚忠太郎
商店事務員	老松源太郎	銀行支配人	麻井武雄

正誤

頁	行	誤	正
二	二	走しる	走る
一三	四	里程表	里程及人車賃表
一三	四	奥津穴鴨	晉源寺上齊原
二四	一二	廣而くして	廣く而して
二四	一三	人品	八品
二八	一二	林九郎	林濟九郎

商品輸出表

明治三十八年分

商品	數量	價格	仕向先
米	三十万石	三百七十五万圓	兵神、阪、北海道
大麥	二万石	十二万圓	丹後、但、雲、藝
小麥	八千石	七万四千四百圓	雲、藝
大豆	一万八千石	十八万圓	丹後、但、雲
食鹽	三万石	十五万六千六百圓	雲、隱、但
清酒	二万石	七十万圓	雲、隱、北海道
和赤砂糖	一萬二千貫	一万〇八百圓	隱、雲
洋白砂糖	一萬貫	一萬一千圓	仝
鰹節	二千、貫	六千六百圓	仝
小豆	二千石	二萬四千圓	雲、隱、石
刻烟草	二千貫	八千、圓	仝
吳服	千個	八萬、圓	雲、石、隱
生糸	千五百貫	八萬二千五百圓	京、阪、濱
紡績糸	三万五千貫	九萬四千五百圓	隱、雲
木綿反物	五万反	三万五千圓	大阪、越前、両羽
繰綿	二万貫	三万五千圓	両越
杉尺〆	千本	三千圓	馬關、九州
松尺〆	千二百本	二千四百圓	仝

商品	數量	價格	仕向地
杉板	千五百間	八百五十五圓	馬關、九州
松板	千間	四百八十圓	仝
洋釘	一万貫	五千圓	雲、隱
和産鐵	一万五千個	六万七千五百圓	仝
壁表	一万五千枚	五千七百圓	隱岐
水油	二百石	八千圓	雲、長
石油	一万五千石	二十七万圓	雲、隱
薪	―	―	―
炭	十万貫	五千圓	朝鮮、大阪
石炭	百五十万斤	五千二百五十圓	出雲
西洋紙	百連	武百五十圓	仝
和紙	五万束	一万五千圓	隱岐、北海道
十鰯(肥料)	四千貫	千四百八十圓	出雲
搾粕	三十万貫	十三萬八千圓	仝
肥鯡	十萬貫	四万五千圓	仝
鰑	一万貫	一万四千圓	兵、神、阪
計		五百九十五万五千三百十五圓	

商品輸入表

明治三十八年分

商品	數量	價格	仕向先
米	二十八万石	三百五十万圓	出雲
大麥	一万五千石	九万圓	兵、九州
小麥	七千石	六万五千百圓	全
大豆	二万石	二十万圓	越後、隱、朝鮮
食鹽	三万五千石	十八万二千七百圓	長、防
清酒	一万五千石	五十二万五千圓	阪、神、雲
和赤砂糖	一萬五千貫	一万三千五百圓	四國、阪、神
洋白砂糖	一萬三千貫	一萬四千二百圓	兵、阪、神
鰹節	二千五百貫	八千二百五十圓	阪、土佐、九州
小豆	二千百石	二萬五千二百圓	兩越、隱
刻烟草	千八百貫	七千二百圓	長、九刕、作
呉服	千二百個	九萬六千圓	京、阪
生糸	八百貫	四萬四千圓	出雲
紡績糸	三万八千貫	十萬二千六百圓	大阪
木綿反物	六万反	四万二千圓	出雲
繰綿	五千貫	八千七百五十圓	全
杉尺〆	千五百本	四千五百圓	雲、隱
松尺〆	千五百本	三千圓	全

商品	數量	價格	仕向地
杉板	千八百間	千二十六圓	雲、隱
松板	千二百間	五百七十六圓	全
洋釘	一万五千貫	七千五百圓	兵、阪
和產鐵	一万六千個	七万二千圓	全、
疊表	一方六千枚	六千八十圓	雲、備
水油	二百五十石	一万圓	北海道、九州、若越
石油	二万石	三十六万圓	兵、神
薪	四十五万貫	四千五百圓	雲、但
炭	十五万貫	七千五百圓	全
石炭	二百十万斤	八千七百五十圓	九刕
西洋紙	百五十連	三百七十五圓	全
和紙	六万束	一万八千圓	雲、
干鰯(肥料)	一万貫	三千七百圓	石、朝鮮
搾粕	三十五万貫	十六萬千圓	北海道
肥餅	十五萬貫	六万七千五百圓	全
錫	一万五千貫	二萬千圓	隱、雲
計		五百六十八万千六百七圓	

94
455

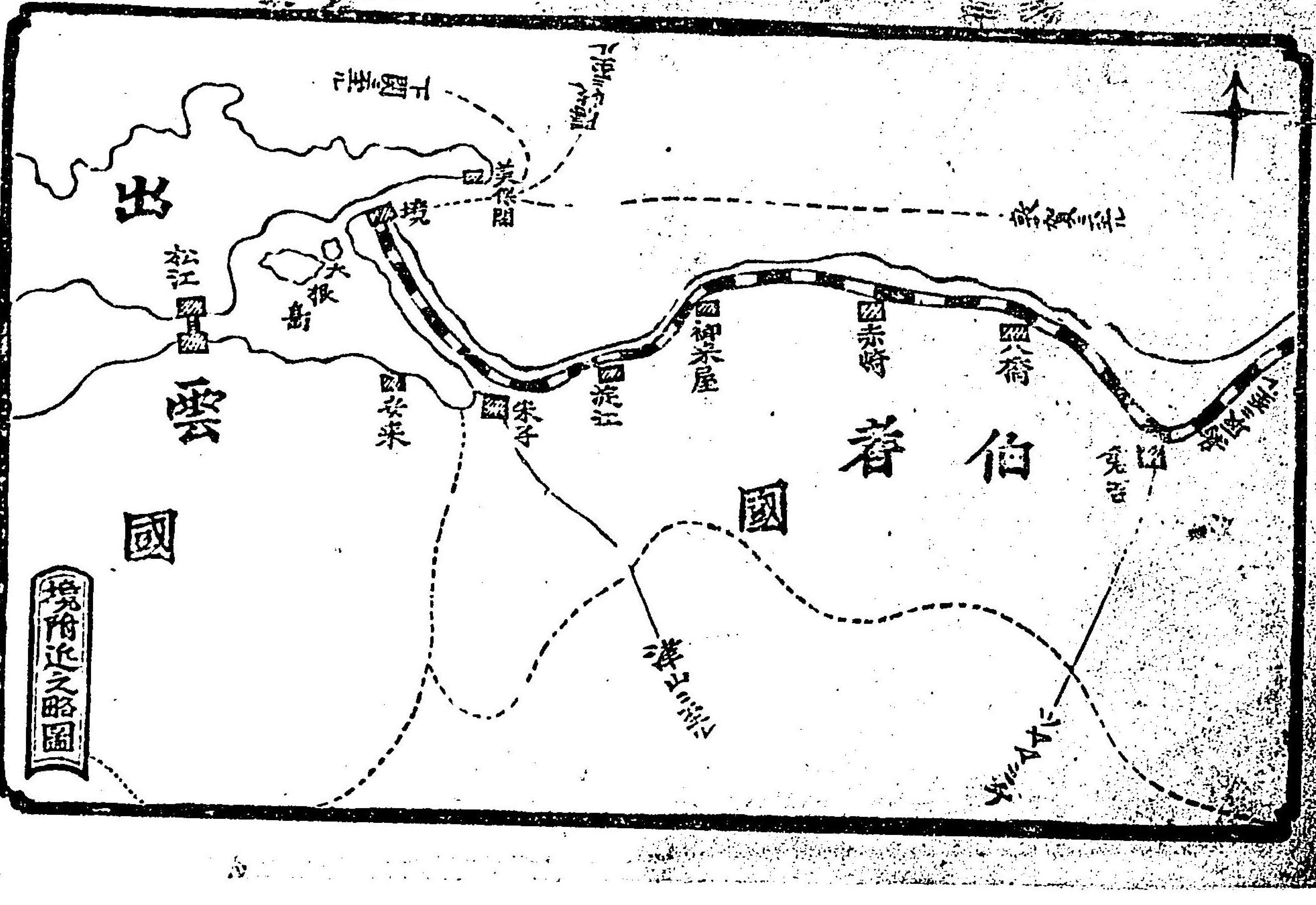
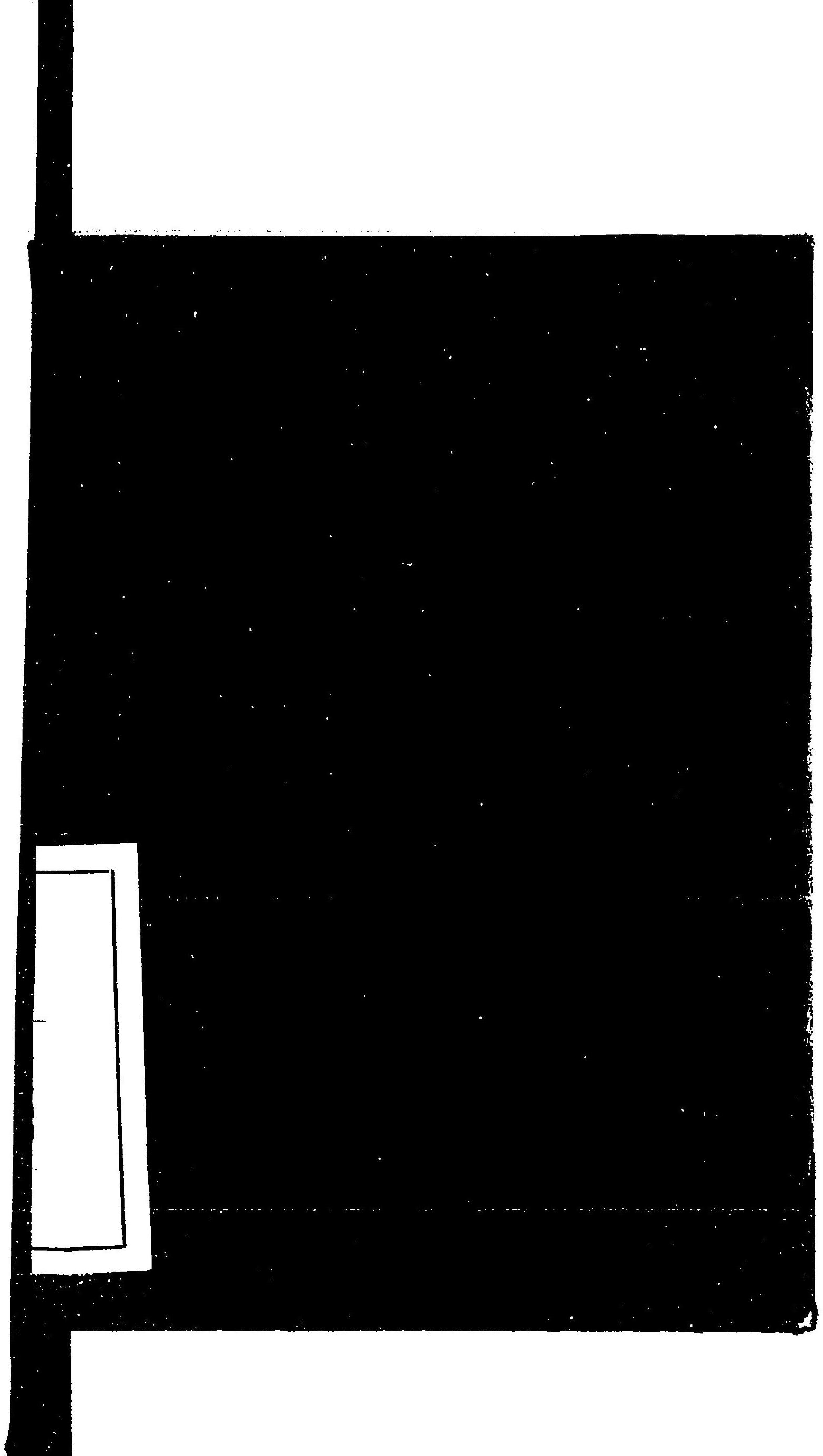
明治卅九年九月廿五日印刷
明治三十九年十月一日發行

不許複製

鳥取縣西伯郡境町六百七十一番邸
編輯兼發行者　境商工會
右代表者　里見周三

鳥取縣西伯郡境町五百八十六番邸
境印刷合資會社
印刷者　里見周三

鳥取縣西伯郡境町五百八十六番邸
印刷所　境印刷合資會社
發行所　境商工會


境附近之略圖
出雲國
伯耆國
松江
大根島
安来
米子
淀江
御来屋
赤崎
八橋
境
美保關